

## 紙の伝播と使用をめぐる諸問題

清水, 和裕  
九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門

<https://doi.org/10.15017/24705>

---

出版情報 : 史淵. 149, pp.79-97, 2012-03-09. Faculty of Humanities, Kyushu University  
バージョン :  
権利関係 :

九州大学大学院人文科学研究院  
『史淵』第149輯 2012年3月刊行

## 紙の伝播と使用をめぐる諸問題

清 水 和 裕

# 紙の伝播と使用をめぐる諸問題

清水 和裕

## はじめに

イスラーム社会に対する紙の伝播と、書籍・文書作製における紙の使用については、すでに多くの研究がなされてきた。日本においては、藤本勝次の論文「製紙法の西伝」や後藤裕加子の「イスラム世界における紙の伝播と書籍業」を代表として、佐藤次高の概説書『イスラームの生活と技術』も、その前半で製紙と紙の伝播を取り扱っている [藤本 1963; 後藤 1992; 佐藤 1999]。またこのテーマの近年の収穫は、J.M.ブルームによる『印刷術以前の紙：イスラーム世界における紙の歴史とその影響』である [Bloom 2001]。同書は、イスラーム社会における紙の使用を、豊富な図版を交えつつ体系的に取り扱い、大きな影響を与えている。

これらによって、紙をめぐる問題の大要はほぼ明らかとなっていると言えよう。一方、本論者は先日、依頼により、この主題を取り扱った原稿を執筆することとなったが、そのなかで、些細な点ではあるがより慎重な検討を必要とする問題が複数存在することに気がつかざるを得なかった。当該原稿は、そのような細部を論じるような性格のものではなかったため、専門的な論証をこの場に移して、若干の考察を試みてみたい。もとより、そのような経緯から生まれた本稿は、論文として1つのテーマを論証し、より大きな歴史学的考察に迫るものではない。後続による今後の研究の進展を期待しつつ、問題の所在を散發的に指摘する研究ノートのようなものであることを了承されたい。

## 1. 紙の伝播についての事実確認

紙が11世紀初頭までにアッバース朝イラク社会に完全に定着していたことは、同時代証拠から明らかである。この時代に活躍した文人サーリービー (al-Tha‘ālibī, d. 429/1038) は、『知識の冗言 (*Laṭā‘if al-Ma‘ārif*)』における有名な文章のなかで、「サマルカンドの特産品には紙があり、それは前の世代が使用していたエジプト製のパピルスや羊皮紙を駆逐してしまった。これは、より見栄えがよく、より柔軟で、より扱いやすく、より書き込みやすいからである」と伝えている [Bosworth 1968: 140]。ヨーロッパに現存する既知の最古の紙製アラビア語写本は、ヒジュラ暦252年ズー・アル＝カアダ月（西暦866年11-12月）の日付をもっており [Witkam 2002] <sup>(1)</sup>、ヴァチカンには、ダマスカスで9世紀初頭に作製されたギリシア語による教父関連の写本が存在している [Bloom 2001: 58]。9世紀初頭から中葉にかけて、紙が写本作製に用いられていたことが、現物から確認できる。

文書に関しては、1877-78年にエジプトのファイユームにおける発掘で発見され、1884年にオーストリアのライナー大公の所有となった文書群がよく知られている。これを調査したカラバツェクによれば、日付をもった最古の紙製文書は874年のものであるという [Bloom 2001: 74]。このコレクションの分析からは、ヒジュラ暦3世紀（西暦815-912年）から4世紀（912-1009年）にかけてパピルスと紙の比率が完全に逆転し、この間に紙の使用が急激に増加することが知られている [藤本 1963: 30; 後藤 1992: 125] <sup>(2)</sup>。西暦10世紀末には、エジプトのパピルス産業が衰退していたと言われているが [佐藤 1999: 20]、現物からもこれが裏付けられるわけである。アッバース朝の中心地域イラクにおいては、残念ながら紙製文書の残存は報告されていない。

上記のような物証および同時代報告を離れて伝承を確認すると、紙の伝播に関する情報は、主にイブン・ナディーム (Ibn al-Nadīm, d. 385/995) による情報と、サーリービーによる情報のふたつとなる <sup>(3)</sup>。ともに極めて著名なものではあるが、念のため以下に掲げる。〔 〕内は本論者による補いである。

①イブン・ナディーム「ホラーサーン紙について言えば、それは亜麻から作られる。一説によれば、それはウマイヤ朝時代に生じ、また一説によればアッバース朝であるという。一説によれば、それは古いものであり、また一説によれば新しいという。さらに一説によれば、中国から来た技術者たちが中国紙をまねて作ったという」[*Fihrist*: 23; *Dodge*: 39-40]。

②サアーリビー「それ〔紙〕はサマルカンドと中国でのみ作られる。『諸国と道程の書』の著者が伝えるには、ズィヤード・ブン・サーリフが捕らえてサマルカンドに連行した中国人捕虜のなかに、サマルカンドで紙の生産を行った技術者たちがいた、という。やがて紙の生産は大規模に行われるようになり、一般に使用されるようになって、サマルカンドの重要な輸出品となった。その価値は世界で認められあらゆる場所の人々がこれを使用するようになった」[*Bosworth* 1968: 140]。

このように、西暦10世紀末から11世紀初頭にかけてのバグダードの知識人には、紙の使用の一般化は自明なことであったが、その伝播についての情報は曖昧になりつつあった。そのなかで特に知られているのが②のサアーリビーによる、いわゆる「タラス河畔の戦い」における伝播説である。タラス河畔の戦いは、133/751年に唐の高仙芝とアッバース朝のズィヤード・ブン・サーリフのあいだで行われた戦いであり、中央アジア西部に対するアッバース朝の支配権を確立する結果を生んだこと、そしてその中国人戦争捕虜がイスラーム社会に紙の製法を伝えたことで知られている。上記の引用が、その大本となる伝承であり、ほぼ同意の内容が、カズヴィーニー (*al-Qazwīnī* d. 682/1283) によっても伝えられている [*Āthār*: 536]。

この「タラス河畔の戦い」伝播説については、すでに藤本の時点で「もともと、サマルカンドを根拠としていたソグド人は、早くからソグディアナにおいても東トルキスタンにおいても、多量の紙を製造していたと考える学者もいる」[藤本 1963: 40] と、これを否定する見解のあることが述べられている。近年ブルームはその著作において、様々な根拠を用いて、この「タラス河畔」伝播説を批判している。一方、佐藤次高は最近の著作においても明確にこの説

に拠っており [佐藤 2010: 39]、研究者間の判断は分かれているといえよう。

サマルカンドのソグド人がタラス河畔の戦い以前に紙を用いていたこと自体は、敦煌から発見された西暦4世紀から6世紀にかけてのものともみられるソグド語の紙製文書や [Bloom 2001: 39]、ムグ山で発見された西暦722年頃の紙製の文書 (A14など) からすでに明らかである [吉田豊 2011: 83-84, 96]。

問題は、これらの紙がサマルカンドで作製されたのか、中国で作製されたものの輸入品なのであるかである。本論者は先述の拙稿において、ブルームが「タラス河畔の戦い」以前にサマルカンドで紙の製作が始まっていたとする論拠を、逐一検討した<sup>(4)</sup>。その詳細は譲るが、結論としてブルームの根拠はすべて状況証拠であり、決定的な論拠は存在しないと判断せざるを得なかった。

確かに紙の利便性や、すでにソグド人が紙の存在になじんでいたことを考えると、サマルカンドにおける自前の紙の製作がなされていてもおかしくはない。しかし、あくまでその具体的もしくは伝承的な証拠は、確実なものが存在していない。現時点では、イスラーム側の伝承に、上記に挙げた2つのものが存在すること、西暦9世紀からイスラーム社会における紙の使用の実例がみられ、10世紀末にはエジプトにおいてもパピルスの使用を圧倒していること。以上を確認することをもって、満足せざるをえないであろう<sup>(5)</sup>。

## 2. バグダードにおける紙の生産について

サマルカンドにおける製紙がどの時点で始まったかは、上記のように確定的な判断ができないが、一般には8世紀末にバグダードでも製紙が始まり、まず行政文書において紙が使用されるようになったといわれる。特に紙の導入に関して、カリフ＝ラシード時代に権勢を誇った宰相一族バルマク家の貢献が指摘されている [佐藤 1999; Bloom 2001]。

しかし、この2点については史料上に若干の疑問点が存在する。本論者の調査は未だ端緒に付いたばかりであり明確な結論に達していないが、とりあえず現時点でこの問題の所在についての指摘をしておきたい。

まず、バグダードにおける製紙の開始であるが、これを伝えるもっとも有名な史料は、イブン・ハルドゥーン『歴史序説』にみられる以下のものである（森本公誠訳による）。

「もともと学術著書や政府の通達、封土譲渡、証書などの書状の書写には動物の皮からとくに作られた皮紙を使っていた。〔中略〕やがて著述や著作が次第にさかんになり、政府の文書や証書も多くなって、もはや皮紙では追いつかなくなった。そこで〔アッバース朝の宰相〕ファドル＝ブン＝ヤフヤーは紙の製造を進言し、紙が造られた。まず政府の文書や証書に紙が用いられ、ついで一般でも公文書や学術著書に用いるようになり、製紙技術はかなりの段階にまで発達した。」〔歴史序説 v. 2: 844-45〕

ここでは①バルマク家のファドル・ブン・ヤフヤーにより製紙が開始されたこと、②紙は政府による文書での使用が先行したこと、の二点が明記されている。ただし、ここには製紙場が設けられた場所や年号については、何も記述されていないことに注意したい。

バグダードに最初の製紙工場が建設された年については794年頃を挙げるのが一般的である〔佐藤 1999: 20; Bloom 2001: 48〕。しかし、ここで我々は藤本勝次の次の指摘を再確認すべきであろう。

「ファズルは西暦794年にホラサーンの知事であった人である。これらの伝承〔イブン・ハルドゥーンおよび後述のマクリーズィーの伝承〕は、カリフ・ハールーン・アル・ラシードの時代のバルマク家宰相によって、紙の製造が首府バグダードではじめられたことを示している。ヨーロッパの学者は、この伝承にもとずき、西暦793年から794年にかけて、首府バグダードに製紙工場が建てられたときめつけているようであるが、アラビア語資料には、バグダードの製紙工場建設年代について明確に書いたものはない。ただ、ヤークート Yāqūt (1229年没) の「地名辞典」に、「ダール・アル・カズ（絹の家）バグダードの一街区で、今日ここで紙が製造されている」とあり、すくなくとも西暦12世紀後半に、バグダードに製紙工場の存在していたことだけははっきりしている。西暦8世紀から9世紀にかけて、製紙工場が建てられたかも知れ

ないが、その年代は不明である」[藤本 1963: 28]。

引用が長くなったが、主要な論点はここに網羅されているというべきである。今回、本論者が確認したところにおいても、794年頃にバグダードで紙の製造が始まったとする史料は目にする事ができず、その論拠をたどることもできなかった。ブルームはその著作において「According to the thirteenth-century encyclopedist Yāqūt, the first paper-mill in Baghdad was established in 794-95 during the reign of the Abbasid caliph Harun al-Rashid」とするが [Bloom 2001: 48]、同書には注が存在しないため、その典拠を確認することができない。本論者が Yāqūt al-Ḥamawī の *Mu‘jam al-Buldān* および *Irshād al-Arīb* を調査した限りでは、該当する記事を発見することはできなかった<sup>(6)</sup>。前者においては、藤本の指摘するように、バグダードにおける製紙を示唆する記事は、ダール・アル=カズ地区における同時代情報が存在するのみである。

一方、794年説について興味深いのは、*Encyclopaedia of Islam* の Kāghad の項目である。その第2版 *new ed.* においてはこの件について、

Paper-mills were erected elsewhere on the plan of those in Samarḳand; al-Faḍl, brother of Dja‘far al-Barmakī, who had been governor of Khurāsān in 178/794, probably founded the paper-mill in the Dār al-Ḳazz quarter in Baghdād.

としているが、この部分は第1版 *1st ed.* の同項目の記述を再掲したものである。しかし、第1版の原文は、al-Faḍl 以降の部分を

al-Faḍl, brother of Dja‘far al-Barmakī, who had been governor of Khurāsān in 178(794) probably founded the paper-mill in the Dār al-Ḳazz quarter in Baghdād.

としており、(794) と probably の間にはカンマが存在しなかった。この部分は明確に、誤読を避けるため第2版の出版に際して手が増えられた部分であると考えられ、逆にいえば、初版の記述は誤読を導きうる、すなわちファドルがホラーサーン総督であった178/794年を製紙場の設立の年と誤認しうる、と判断されたのであろうと考えられる。この記述が794年説の根源と断定することはできないが、*Encyclopaedia of Islam, 1st ed.* が学界にもった影響力を考えれば、その説を大きく後押しした可能性は高い。



それでは藤本が「西暦8世紀から9世紀にかけて、製紙工場が建てられたかも知れない」とする点はどうか。これも藤本が指摘するように、380/990年以降に死去した地理学者ムカッダシーは、シリアのダマスカスとタバリーヤの「商品 (al-tijārāt)」として「紙 (kāghad)」を挙げている。おそらくこれらの地には製紙場が存在したのであろう [*Taqāsīm*: 180-81]<sup>(7)</sup>。また、385/995年死去のイブン・ナディームは、自らの体験として、ある人物が「中国紙 (waraq Šīnī)」「ティハーマ紙 (waraq Tihāmī)」「ホラーサーン紙 (waraq Khurāsānī)」所有しているのをみたという<sup>(8)</sup>。ここからアラビア半島のティハーマでも紙が生産されていたことがわかる。このように、伝承に拠らない同時代情報として、10世紀末までに紙の生産がサマルカンド以外でも行われていたことを考慮すれば、バグダードのダール・アル＝カッズ地区における紙の生産も、10世紀までには遡ることが予想される。しかし一方で、サアリービーは「それ〔紙〕はサマルカンドと中国でのみ作られる。」と断言しており、イブン・ナディームも筆写材の材料について述べる際に、紙 (waraq) については「中国紙」と「ホラーサーン紙」以外に触れない<sup>(9)</sup>。西暦9世紀のイラクやエジプトに紙が存在したことは、第1節で確認したとおりであるが、その生産地は不明である。イブン・ハルドゥーンが伝えるように紙の生産がラシードの時代にバルマク家の指導で始まっていたとしても、10世紀末の段階ではまだ、バグダードで生産された紙はサマルカンド紙や中国紙に比べて、あくまで副次的な存在であったと思われるのである。

はるかに下ってマムルーク朝時代の書記カルカジャンディー (d. 821/1418) は、マムルーク朝における最高級紙をバグダード紙とし、その下がシリア紙、さらにその下をエジプト紙としている [*Šubḥ* v. 2: 487; v. 6: 190]。14世紀後半のサマルカンドはティムール朝下でモンゴルによる破壊から新市街を形成し復興を遂げつつあったが、すでにその紙はマムルーク朝の視野からははずれており、同じくモンゴルによる破壊を経つつも、バグダードの紙がかつてのサマルカンドの紙 (ホラーサーン紙) の地位を獲得していたことがわかる。しかし、これは明らかにモンゴル西進の時代を経た変化であり、この情報をもって、10

世紀以前のバグダード紙の質量を判断する根拠とすることは不可能であろう。

### 3. 行政における紙の使用に関する問題

アッバース朝政府における紙の導入については、イブン・ハルドゥーン (d. 808/1406) 以外に、以下の情報が伝わっている。

#### ①マクリーズィー (d. 845/1442) の情報

「初期イスラーム時代の官庁における書記術では、書くものを一枚の巻物状にしていた。ウマイヤ家の時代が終わり、アブドゥッラー・ブン・ムハンマド・アブー・アルアッバース・サッファーフが立つと、アブー・サラマ・ハフス・ブン・スライマーン・ハッラールの次ぎにハーリド・ブン・バルマクが宰相となった。彼は官庁で皮紙の冊子 (dafātīr) を用い、それに書き、巻物を廃止した。これがラシードの時代にジャアファル・ブン・ヤフヤー・ブン・ハーリド・ブン・バルマクが行政を司るまで続き、彼は紙 (kāghad) を採用した。彼のあとの人々は今日までそれに習っている。」 [Khitāṭ v. 1: 245]

#### ②カルカシャンディーの情報

「教友たち——神が彼らに満足せんことを——の意見は、クルアーンを書く際には皮紙 (raqq) を用いることで一致していた。これは、長持ちするから、もしくは、その当時彼らに入手可能だったからである。人々はラシードがカリフ位に就くまで、このままであったが、[この時代に] 紙 (waraq) が増え、人々にその使用が広まると、紙 (kāghad) 以外に書類を書かないよう命が下った。というのは皮 (julūd) やその類は消したり訂正したりすることが可能で、偽造することができたからである。それは紙 (waraq) と違い、紙は消されると劣化し、もし掻き落としても掻き落としたことがわかる。紙 (waraq) に書くことはあらゆる地方に広がり、遠近を問わずそれを用いるようになった。人々は現在に至るまでそのままである」 [Ṣubḥ v. 2: 486]

これら3つの情報によって、現在、カリフ＝ラシード時代に行政分野で紙が採用され、それが他の一般分野に及んだことが了解されているのである [藤本

1963: 27-28, 32-33]。

しかし、奇妙なことに、これらの情報は全てマムルーク朝時代の非常に限定された時期に記述されたものである。アダブ文学を完成し、紙の導入によってワッラークと呼ばれる書籍商が活躍して、現在にも残る無数の著作活動が行われたアッバース朝の同時代史料は、行政分野における紙の導入時期について明確な情報を残していないようである<sup>(10)</sup>。

例えば、ハーリド・ブン・バルマクが巻物ではなく皮紙の冊子を用いたことは、331/942年没のジャフシャーリーが「官庁で登録を行うときの方法は、一枚のもの (ṣuḥaf) に登録することになっていた。ハーリドはこれを冊子にした最初の人物であった」[*al-Wuzarā'*: 89] と記述し、同じ内容がサアーリビーによっても伝えられている [Bosworth 1968: 49]。これらがマクリーズィーの情報源であると思われるが、いずれもその関心はハーリド・ブン・バルマクのエピソードを伝えることにあり、紙の導入についての記述は存在しない。またジャフシャーリーはマンスールの事績を述べる部分で、マンスールが宮廷に貯蔵されていたパピルスの売却を指示したものの心変わりをしたことを伝えている。

「翌日、マンスールは私を呼び出しました。私が彼の許に入ると、彼が言うには「私は文書のことについて考えたてみた。それにはパピルス紙 (qrātīs) を用いているのだが、エジプトの情勢は安心できない。それが原因でパピルス紙が手に入らなくなるだろう。そうなれば、私たちの書記が慣れていない書材で文書を作成しなければなくなる。だから、パピルス紙は今のままにしておけ」。こうした理由から、ペルシア人は皮 (julūd) と皮紙 (raqq) でしか文書を作成しなかった。彼らは「我らは自分たちの国にないもので文書を作成しない」と語っていた。」[*al-Wuzarā'*: 138]

このようにジャフシャーリーの伝えるところでは、マンスールの宮廷は全面的にパピルス紙に依存していた。ここではパピルスか皮紙かという書材が問題となっているが、紙についてはまったく触れられていない<sup>(11)</sup>。

ジャフシャーリーと同時代で335/947年没の文人アブー・バクル・スーリーは書記術についての書『書記の教養』のなかで書材 (qirtās) についてふれて

いるが、「アラブは書くための素材をキルタースと呼んでいる」とするのみで、その素材が何であるかについては全くふれていない。キルタースとは元来はパピルス紙をさしていたが、スーリーの述べるように書材そのものを指すようになったため、後世には皮紙や紙にも用いられるようになり、ポルトガル語のカルタの語源となった [Sellheim EI2]。そのため、このスーリーの意味するキルタースがパピルスであるのか、紙であるのかを知るのは困難である。しかし、この時代にはまだパピルス紙が流通していたことや、先述した同時代人であるジャフシャーリーの用法からすればパピルス紙を念頭に置いていた可能性が高いといえるだろう。もしくは、両者の区別をつけずにいたとも考えられる。

若干の例を挙げたが、このように、ファドルによる製紙場の設置と同じく、現在までのところアッバース朝期の史料には、ラシード時代のバルマク家による紙の導入を伝えた史料を見いだすことができない。この伝承は、14世紀末頃に突如として現れるものといわざるを得ない。

次に興味深いのは、イブン・ナディームの以下の情報である。この文章は解釈に問題があるため、まず原文のアラビア語を提示する。

أقام الناس ببغداد سنين لا يكتبون إلا في الطروس، لان الدواوين نهبت في أيام محمد  
ابن زبيدة وكانت في جلود، فكانت تمحى ويكتب فيها.

この文章には、先行する2つの訳が存在する。まずイブン・ナディームの著作『目録 (al-Fihrist)』を全訳したDodgeによるものである。

① For a number of years the people of Baghdād wrote on erased sheets. The registers spoiled at the time of Muḥammad ibn Zubaydah were parchments, which after being erased were once more written upon. (「長年の間、バグダードの人々は使用済みの再生皮紙に書いていた。ムハンマド・ブン・ズバイダの時代に奪われた登録簿は羊皮紙であり、それは〔内容を〕消された上でもう一度書かれていた」) [Dodge 1970: 40]

もうひとつの訳は藤本勝次によるものである。

② 「バグダードで人々が長年の間紙葉 (turūs) のみを書写材料に使ってきたのは、ムハンマド・ビン・ズバイダの時代に、羊皮紙に書かれた役所の帳簿が盗

まれ、その文字が消され、書き直されたからである」[藤本 1963: 34]

この文章のひとつのポイントは、ラシード死後の第6代カリフ・アミン（ムハンマド・ブン・ズバイダ）の時代に羊皮紙が用いられていたことにあり、この点は両者は一致しているが、それ以外の点では両者の理解は大きく異なっている。これは、文中の *ṭurūs* という単語の理解が異なることと、*li-anna* という接続詞の処理の違いに起因している。

*li-anna* は理由を示す接続詞であり、藤本の訳では、〈バグダードで紙葉が用いられるようになったのは、盗まれた帳簿が改竄されたからである〉という理解で訳出されているのに対して、ブルームの訳では、前半の文章と後半の文章に論理的つながりがなく、*li-anna* は訳出されないまま放置されている。これは、ブルームの理解では前半と後半の内容に論理的接続を見いだせないからである。

一方、*ṭurūs* という単語に関しては、ブルームのように理解するのが一般的である。すなわち E. Lane のアラビア語辞典によれば *ṭurūs* の単数形 *ṭirs* は a written paper or the like であり *ṣahīfa* と同義であるが、同時に one of which the writing has been obliterated, or effaced, and which has then been written upon [again] であるとされ、palimpsest すなわち「書いたものを消した上にまた書けるようにした古代の羊皮紙」を意味するとされている。また 711/1312 年死去のイブン・マンズールによるアラビア語辞典では、「*ṣahīfa* であり、これは一旦消されてその後書かれたものであるといわれる」「消されてその後書かれた文書」「再び書写に用いるために消された文書」など、再生書写材の意味のみが記されている。ここでは材料についてはふれられていないが、再生可能な書写材であることから、概ね皮紙であると考えてよいであろう。さらに最近の研究では、Gecek が Parchments were also reused as supports for other texts. Known as palimpsests (*ṭirs*, *ṭils*), a number of these used parchments have survived. として、この再生皮紙の実例が伝存していることを示している [Gecek 2009: 196]。

これに対して、カルカシャンディーは *ṭirs* について明確に紙 (*waraq*) の項目のなかで述べている。その節は「言語に現れる *waraq* の名称の解説とその種類

の知識」というものであり、そこでは以下のように説明されている。

「al-waraq とは、多少に関わらず用いられる集合名詞であり、単数は waraq、複数形は awrāq、waraqa の複数形は waraqāt である。ここから、書写生は warrāq と名付けられる。聖なるクルアーンは、それをキルタース (qirtās) やサヒーファ (ṣahīfa) の名で呼んでおり、これについてはすでに説明した。それはまたカーガド (kāghad) とも呼ばれ、ṣahīfa は tirs 複数形は turūs とも呼ばれる。また muhraq 複数形は mahāriq とも呼ばれる。ジャウハリーに拠れば、それはアラビア語化したペルシア語である」 [Ṣubḥ v. 2: 487]

ここで、「すでに説明した」とある部分は、カルカシャンディーが書材について述べる部分である。そこでは、書材として板と皮紙が挙げられた後、第3の書材として以下の説明がなされている。

「第3：キルタース (al-qirtās) やサヒーファ (al-ṣahīfa)、この両者はひとつのものを意味し、すなわちカーガド (al-kāghad) である。キルタースについていえば、いと高き方がおっしゃるには、〈たとえわれらが文書 (qirtās) にしたためた啓典を汝に下して、彼らに手でふれさせたとしても、信仰にそむく者どもは、「これは明らかに魔法にほかならない」と言うであろう (家畜の章6)〉。イブン・アビー・サイヤールによれば、キルタース (al-qirtās) とはエジプトのパピルス (bardī Miṣr) から出来たカーガド (kāghad) であり、あらゆるカーガド (kāghad) はキルタース (qirtās) である」 [Ṣubḥ v. 2: 485]

以上のカルカシャンディーの説明は一見すると混乱しているようであるが、少なくともカルカシャンディーの用法ではワラク (waraq) とは「中国の人々は葉 (ḥaṣhīsh) や葉 (kala') から作った (yaṣna'ūna) ワラク (waraq) に書写を行っていた。彼らから、人々はワラク (al-waraq) の製法を入手した」 [Ṣubḥ v. 2: 485] とあるように、いわゆる「紙」を意味しており<sup>(12)</sup>、ペルシア語起源のカーガドも一貫して「紙」を意味するのに用いられる用語である。ここから、カルカシャンディーの理解では、ワラク、キルタース、サヒーファ、カーガド、ティルス、ムフラクの全てが「紙」の呼称であることになる。ただし、クルアーンの時代に「紙」がないことは明らかであるので、イブン・アビー・

サイヤールを引用して、このキルタースを「エジプトのパピルス出来た「紙（カーガド）」とし、キルタースという用語は過去のパピルス製を含めたあらゆる「紙」を含みうる、と注釈するのである。

このようなカルカシャンディーの態度は、マムルーク朝までにパピルスや再生皮紙が駆逐され、「紙」が書材をほぼ独占していた状況から生まれるものであろう。過去にこれら「紙」以外の書材を意味していた *qirtās* や *tīrs* という単語は、カルカシャンディーの時代までに、単に「紙」を意味するものへと転化し、「一枚物」を意味する *ṣaḥīfa* もパピルス紙や羊皮紙の一枚物ではなく、「紙」の一枚物を意味するように転化した。様々な書材を表す用語が全て「紙」を意味する言葉として吸収されているのである。現代のアラビア語－英語辞典をみても、古典語を多く収録する J.G. Hava の *al-Farā'id* は *tīrs* を *Lief of paper. Palimpsest.* とするのに対して、J.M. Cowan 編集の *The Hans Wehr Dictionary of Modern Written Arabic* は、*sheet (of paper); paper* とするのみである。イブン・マンズールが再生皮紙の用法のみを記録していることを考えれば、両者の転化は14世紀頃には終わっていたと考えるべきであろう<sup>(13)</sup>。つまり、ここでの結論は、イブン・ナディームの時代に再生皮紙を意味していた *tīrs* という言葉が、カルカシャンディーの時代には「紙」を意味するようになっていたというものである。

そのような理解に従って、本節冒頭に提示したカルカシャンディーの引用にもう一度目を戻すと、非常に興味深いことに気付かざるをえない。その引用部を再掲するとともにアラビア語原文を付す。

「人々にその使用が広まると、紙 (*kāghad*) 以外に書類を書かないよう命が下った。というのは皮 (*juḷūd*) やその類は消したり訂正したりすることが可能で、偽造することができたからである。」

وفشا عمله بين الناس أمر ألا يكتب الناس إلا في الكاغد، لأن الجلود ونحوها تقبل المحو  
والإعادة فتقبل التزوير

この文章と、先のイブン・ナディームの文章構成は、前半で書材の限定を伝え、後半で皮紙に書かれた文の抹消と書き加えを伝え、両者を *li-anna* という理

由の接続詞で結んでいる点で、非常に似通っている。個々の単語の選択や表現には違いがあるが、全体の文章には抜きがたい共通性が見て取られるように思われる。おそらく、この一致は偶然ではない。なぜなら、イブン・ナディーム、カルカシャンディーとともに、この文の直前に、過去の諸国（ともにal-umamと表現）において書写に用いられた書材を列挙し、そのなかでイブン・ナディームは「中国では中国紙を用いる。これは葉 (al-ḥashīsh) から作製 (yu‘mal) される」[Fihrist; 22-23] と表現するなど、ここでも完全に一致しないまでも、非常によく共通する内容や用語があらわれているからである。カルカシャンディーの念頭に、イブン・ナディームの原文が存在したことは、ほぼ間違いない。

そして先に引用したイブン・ナディームの文章において、カルカシャンディーと特に一致する表現 *lā yukātibūna illā fi al-ṭurūs* が後者では、*lā yaktub al-nās illā fi al-kāghad* に変化している。すなわち、カルカシャンディーによって元々のティルスがカーガドに置き換えられているのであるが、これはここまで述べたとおり、カルカシャンディーにとってティルスとカーガドは同じく「紙」を意味したからであろう。つまり、この文はカルカシャンディーの「誤読」によって生まれている可能性があるのである。そして、カルカシャンディーの誤読による理解は、ほぼ藤本の訳 [上記②] に等しいものであった。つまり、藤本の訳は、イブン・ナディームの文章の理解としてはおそらく誤りであるが、同時に、マムルーク朝期におけるこの文章の「読み」を再現したものであったと言えるだろう<sup>(14)</sup>。

それでは、イブン・ナディームの文章はどのように理解すべきであろうか。残念ながら、現時点ではDodgeの訳に従わざるを得ない。しかし、この訳はli-annaの処理に明らかな無理が存在する。これはカルカシャンディーの文章でli-annaがはっきりと「理由の提示」の機能を果たしていることから明らかであろう。

ひとつの試訳として、このような理解も可能だろうか。「バグダードの人々は長年再生皮紙以外を使うことがなかった。なぜならアミーンの時代に官庁の登録簿が荒らされたからである。その登録簿は皮紙であったが、人々はその内



容を消し、その上に新たに文書を作成した」。この理解では、バグダードの書記たちは、アミンとマアムーンの内乱の結果荒廃したディーワーンを、ある意味でリセットし、その廃紙を用いて文書を作成したことになる。すなわち、アミン時代の登録簿が再生皮紙で作製されていたという Dodge の理解とは大きく異なり、またラシード時代どころかマアムーン時代以降も永らくアッバース朝政府が再生皮紙を用いていたこととなる。かなり、大きく従来の理解を修正することとなろう。ここでは、あくまで可能性のひとつとして止めておきたい。

これまで議論してきたように、ラシードの時代に紙が導入されたという証拠は、マムルーク朝を遡ることがむずかしい。マクリーズィーの情報はジャフシャーリーに基づき、カルカシャンディエーの情報はイブン・ナディームの情報に基づいていたが、いずれもその原文には、ラシード時代の紙の採用に関する記述は存在しなかった。カルカシャンディエーの記述に至っては、本来ムハンマド・アミンの時代に関する情報であったものを、その部分を削除し、時代の要請にもとづく誤読によって文脈を改変しつつ、ラシードに関する情報を新たに付加したものである。

また同様に、「紙」が皮紙に代わって採用されるようになった理由について、従来は皮紙が容易に改変可能であったことを挙げてきた。しかし、その根拠となったカルカシャンディエーの文章は、イブン・ナディームのそれと対応させつつ再検討する必要が生まれたように思う。もちろん、皮紙が改変可能であったことは事実であり、それが行政に不利益をもたらすことも明らかである。しかし、両者を結びつける論理の連環に、若干のほころびが見えつつあるのではないか。

## おわりに

以上本稿では、「紙の伝播と導入」に関してこれまで常識とされてきたいくつかの事柄について、その論拠に疑義が存在することを指摘し、若干の考察を試みた。

すなわち、(1) 794年頃にバグダードに最初の製紙場が生まれたという情

報は根拠がないとする藤本の指摘を再確認した。また、それに応じて、バグダードの製紙は10世紀段階では、紙の供給に対して決定的な役割を果たしてはいなかった可能性が生じた。(2) バルマク家がラシードの時代に紙の導入を行ったという情報が、マムルーク朝期のものであり、アッバース朝期には発見できていないことが明らかとなった。(3) それらに関するマムルーク朝期のテキストの生成過程の一部が明らかとなった。その結果、それらのテキストは、パピルスと紙の使用をめぐって大きく変化した環境の影響をうけており、10世紀のテキストが14世紀の環境から「読まれ」「改変され」「新たな情報を生み出している」可能性を指摘した。(4) これに従って、イブン・ナディームの伝える情報を今後再検討する必要を指摘した。(5) 同時に、再生皮紙の使用や皮紙における改変と紙の導入をめぐる因果関係について、これも再検討する余地があることを指摘した。

全体として、不十分な研究ノートであり、従来の否定にとどまって建設的な議論の再提出が出来ていない点は、論者の力不足である。しかし、今回提示した諸点は、この問題を大きく塗り替えることはなくとも、従来像を少なからず修正するきっかけにはなるのではないか。今後の研究の進展を期したい<sup>(15)</sup>。

まずは、あの膨大なアッバース朝期の文学群のうちに、バグダードにおける製紙場の設置や紙の採用に関する明確な記述を見つけ出すことが第一であろう。諸賢のご示唆ご教示をも期待して、ここで筆を擱きたい。

#### 〈一次史料・翻訳〉

- Āthār*: al-Qazwīnī, Zakaryā' b. Muḥammad, *Āthār al-Bilād wa Akhbār al-'Ibād*. Bayrūt: Dār Ṣādir, n. d.  
*Buldān*: Ya'qūbī, Aḥmad b. Abī Ya'qūb. *Kitāb al-Buldān*, ed. M. J. de Goeje. Leiden: E.J. Brill. 1892.  
*Fihrist*: Ibn Nadīm, Abū al-Faraj Muḥammad b. Iṣḥāq. *Kitāb al-Fihrist*, ed. Riḍā Tajaddud. Tehrān. 1971.  
*Khiṭaṭ*: al-Maqrīzī, Taqī al-Dīn Aḥmad b. 'Alī. *al-Mawā'iz wa al-I'tibār fī Dhikr al-Khiṭaṭ wa al-Āthār*, ed. Amīn Fu'ād Sayyid. London: Mu'assasa al-Furqān li al-Tirāth al-Islāmī. 2002.  
*Kuttāb*: al-Ṣūlī, Abū Bakr Muḥammad, Adab al-Kuttāb, ed. Aḥmad Ḥasan Basaj, Bayrūt: Dār al-Kutub al-'Ilmiya. 1994.  
*Ṣubḥ*: al-Qalqashandī, Abū al-'Abbās Aḥmad b. 'Alī, *Ṣubḥ al-A'shā fī Ṣinā'a al-Inshā*, 14vols. al-Qāhira: al-Maṭba'a Amīriya, 1910-20.

- Subkī*: Tāj al-Dīn Abū Naṣr ‘Abd al-Wahhāb. *Mu‘īd al-Ni‘am wa Mubīd al-Niqam*, ed. D. W. Myhrman. London: Luzac & Co. 1908.
- Taqāsīm*: al-Muqaddasī, Shams al-Dīn Abū ‘Abd Allāh Muḥammad, *Aḥsan al-Taqāsīm fī Ma‘rifat al-Aqālīm*. Leiden: E.J.Brill. 1967.
- Wuzarā’*: al-Jahshiyārī, Abū ‘Abd Allāh Muḥammad. *Kitāb al-Wuzarā’ wa al-Kuttāb*, ed. Ibrāhīm Abyārī et.al. Miṣr: Muṣṭafā al-Bābī al-Ḥalabī wa Awlād-hu. 1980 (2nd ed.)
- 歴史序説：イブン・ハルドゥーン『歴史序説』（森本公誠訳）全3巻、岩波書店、1979-86。
- 世界史史料：歴史学研究会編『世界史史料』全12巻、岩波書店、2006-刊行中
- コーラン：藤本勝次、伴康哉、池田修訳『コーラン』全2巻、中央公論新社、2002。
- Bosworth, C. E. 1968. *The Latā‘if al-Ma‘ārif of Tha‘ālibī*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Dodge, B. 1970. *The Fihrist: A 10th Century AD Survey of Islamic Culture*. New York: Columbia University Press.

#### 〈単行本・論文〉

- クラチコフスキー, I. Y. 1969 「ソグディアナからの手紙」ヤクポーフスキー他『西域の秘宝を求めて——スキタイとソグドとホレズム』（加藤九祚訳）新時代社。
- 後藤裕加子 1992 「イスラム世界における紙の伝播と書籍業——バグダードのワッラークを中心として」『日本中東学会年報』7, pp. 113-43.
- 佐藤次高 1999 『イスラームの生活と技術』山川出版社。
- 佐藤次高 2010 『イスラームの歴史1——イスラームの創始と展開』山川出版社。
- 清水和裕 2005 『軍事奴隷・官僚・民衆——アッバース朝解体期のイラク社会』山川出版社。
- 吉田 豊 2011 「ソグド人の言語」曾布川寛・吉田豊編『ソグド人の美術と言語』臨川書店
- 濱田正美 2008 『中央アジアのイスラーム』山川出版社。
- 藤本勝次 1963 「製紙法の西伝」『泊園』2, pp. 22-42.
- 森部 豊 2010 『ソグド人の東方活動と東ユーラシア世界の歴史的展開』関西大学出版部。
- 森安孝夫 2007 『シルクロードと唐帝国』講談社。
- Bloom, J. M. 2001. *Paper before Print: the History and Impact of Paper in the Islamic World*. New Haven: Yale University Press.
- Diem, W. 1997. *Arabische Briefe des 7. bis 13. Jahrhunderts aus den Staatlichen Museen Berlin: Textband*. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.
- Gecek, A. 2009. *Arabic Manuscripts: A Vademecum for Readers*. Leiden: Brill.
- Huart, C.L. "Kāghid" in *Encyclopaedia of Islam 1st ed*. Leiden: E.J. Brill.
- Huart, C.L. & A. Grohmann. "Kāghid" in *Encyclopaedia of Islam 2nd ed*. Leiden: E.J. Brill.
- Le Strange, G. 1900. *Baghdad during the Abbasid Caliphate from Contemporary Arabic and Persian Sources*. Oxford: Clarendon Press.

Sellheim, R. "Kirtās" in *Encyclopaedia of Islam 2nd ed.* Leiden: E.J.Brill.

Witkam, J. J. 2002, "The Oldest Known Dated Arabic Manuscripts on Paper (dated Dhu al-Qa'da 252 (866 AD))" in [http://www.islamicmanuscripts.info/E-publications/witkam\\_oldest\\_dated/index.html](http://www.islamicmanuscripts.info/E-publications/witkam_oldest_dated/index.html) (2007, reviewed and republished). (2011/10/25 閲覧)

## 註

- (1) Bloomは、エジプトのアレキサンドリアで近年発見された写本が西暦848年の日付を持ち、最古のアラビア語写本であるとするが [Bloom 2001: 58]、Witkamはこの情報を不確定なものとして扱っている。
- (2) 同じ傾向は、ベルリン国立博物館所蔵のエジプト・アラビア語文書を収録したDiem 1996にもはっきりとみることが可能で、所収62点のうちヒジュラ暦3世紀までの44点はすべてパピルス、ヒジュラ暦4世紀以降の18点はすべて紙が用いられている。
- (3) 藤本は、これら以外に30/650年頃にサマルカンドに製紙法が伝わり、88/706年にはメッカで紙が製造されていたとするアリー・ブン・ムハンマドという人物の伝承を紹介し、その真偽は不明としているが、原典史料の情報が不明確で内容にもわかには信じがたい。今後の研究の進展を待ちたい。一方、藤本はこの伝承の傍証として、イブン・ナディームの『目録』所収の情報を挙げる。それは150/767年死去のムハンマド・ブン・イスハークが、メッカ近郊ティハマ生産の紙を目撃したというものである。しかし、この引用は藤本の誤りであり、ここに現れるムハンマド・ブン・イスハークとは、イブン・ナディーム本人のことを指している [Fihrist: 46; Dodge 1970: 88-89]。すなわち、この記事は385/995年死去の著者自身の体験談であって、8世紀前半にメッカで紙の生産がなされていたことの傍証とはなり得ない。
- (4) 名古屋大学出版会より出版される論集『イスラーム書物の歴史』に収録される予定である。
- (5) より本質的には、この問題は①ソグド文化と中国文化の重層性、②ソグド文化とアラブ・イスラーム文化の重層性、③ソグド文化、ペルシア文化のイスラーム化と改宗者や被保護者(マワーリー)の西方移動、すなわちイスラーム化したソグド人とソグド文化がアッバース朝の周縁に位置づけられ、イラク中央からさらに西方へと引き込まれていく現象、という三点から理解されるべきものである。
- (6) 両著作は大部なものであるため、テキストデータによる全文検索も援用した。全ページをくまなく読破しての調査ではないため、不十分なものであることは確かである。
- (7) 藤本は「シリアのダマスカスやタバリアにも製紙工場が当時存在していたことは明らか」としているが [藤本 1963: 29]、ムカッダシーの記述は、多数の「商品」を列挙するなかで「紙」とひとこと挙げるのみで、余分な情報を全く含んでいない。
- (8) 注3を参照のこと。

- (9) イブン・ナディームは、ホラーサーン紙の種類として、ターヒリー紙 (al-Ṭahīrī) など明らかにホラーサーン地方と関連のある紙の名前のなかに、ファラオ紙 (al-Fir'awnī) というものを挙げている。これがエジプト生産のものであるとするならば、イブン・ナディームは紙を、鞣皮繊維から作製される「中国紙」と亜麻布から作製される「ホラーサーン紙」に分類し、イスラーム社会で作製される紙一般を「ホラーサーン紙」の名で分類しているのかもしれない。ただしその場合、「ティハーマ紙」の存在が問題となる。一方その解釈が正しければ、イブン・ナディームの挙げるジャアファリー紙 (al-Ja'farī) は、先行研究の説くようにバルマク家のジャアファル・ブン・ヤフヤーに由来し、これがバグダード製の紙であると思われる。
- (10) もちろん、これはいままでも単に見過ごされてきただけであるかも知れず、今後その記述が明らかになる余地は残されている。しかし、この問題についてこれまで多くの先人が研究を重ねてきたにもかかわらず、既知のものとなっていないのも、また事実である。
- (11) ブルームは、al-Jahshiyari noted that paper had been introduced during the reign of al-Mansur, founder of Baghdad. と記述しているが [Bloom 2001: 49]、そのような記述は見あたらず、逆にマンスール宮廷でパピルスが使用されていたことがわかるのみである。
- (12) waraq の原義は「葉」である。このため史料にあらわれる waraq の意味は、一様に確定できるわけではない。同様に waraq とは「ディルハム銀貨」を意味する言葉でもある。
- (13) もちろん、アラビア語の原義を重視する立場からイブン・マンズールが意図的に ṭīrs の「紙」としての用法を排除していたとすれば、転化の時代は若干遡りうるが、それでも400年前にその用法が定着していたならば、当然イブン・マンズールも古典的用法としてそれを収録したであろう。
- (14) というよりは、藤本がカルカシャンディーの文章を念頭に置きつつイブン・ナディームの文章を理解した結果であるといえようか。
- (15) 本稿では検討できなかったが、ṭūmār の概念についても検討の余地が存在する。ṭūmār とは文書に使用される書写材の標準的な最大寸のことであるが、これをもとにして qalam ṭūmār と呼ばれる文書作成書体の最大標準サイズ、すなわち字体の大きさや太さが決定された。問題は、この ṭūmār の概念が、パピルス紙の時代と「紙」の時代にまたがって見受けられる点である。本来 ṭūmār がパピルス紙の標準サイズから決定されていたのであるならば、それがサマルカンド製の紙に移行したときに、サイズはどのような影響を受けたのか、受けなかったのか。もし書体のサイズが一定のまま共通して用いられたのであれば、パピルス紙のサイズがサマルカンド製の紙に影響を与えていなければならない。このような課題は、文献とともに現物にあたって研究を行う必要があり、これも今後の進展を期待したい。

